
臨終の言葉

馬路キレ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

臨終の言葉

【Zコード】

N4017E

【作者名】

馬路キレ子

【あらすじ】

人の死ぬ時。その最後の瞬間に伝える臨終の言葉とは、その人がそれまで生きてきた結果だ。

まだまだ若い若い。休暇なんて死んだらいくらいで取れる。

そう思いながら、時代という激動の渦中を政治学とペン一本で駆け抜けってきた私が、極度の疲労で倒れ病院に担ぎ込まれた時は、もう手遅れだった。三十路半ばを迎えるながらも、外見に多少の自信があった私の体の『中身』は、幾つかの内臓に転移した悪性腫瘍と癌に犯されていた。

医者は顔の色を濁らせながら「手術すれば助かります。助かりますから心配しないで」と、やけに親身になつて話してきたが、おそらく私の余命は1ヶ月もあるまい。思い当たる節が無いわけではない。今まで病気一つしたことがなかつた体の悲鳴は、私自身薄々気付いていたのだ。長く付き合つてきた主治医でもない、何処ぞの医者に遠まわしに言われなくともわかるというものだ。

私は、あと少しで死ぬのだ。

案外、死の宣告というのは聞いてしまえば怖くないものだと思った。若くして亡くなつた私の母が言つていた。「生きるということは、同時に死ぬという事と直結しているものなのだ」と。徐々に冷たくなる手を私に握らせながら、その臨終の時まで語りかける母の説得力は、多感な中学生時代を迎えていた私の心に焼き付いていたのだ。

ただ、死というのは不条理だ。どのような時でも後悔が先に浮かぶ。

国を背負つて立つ、といつほどのではないが、まだ私には満足できる

ほどの権力が無い。生と死を天秤の片方にかけて量るには、余りにも軽すぎる生きた結果だ。今の自分が持つていてる社会的地位と権力は、死ぬには低すぎる。私が幼き頃から抱いていた、社会権力の支配というしつぽけな野望の壁画は、日々の目を見ることなく未完に終わると思つて、少々の悔しさが胸を焦がす。

私の不満足な最終履歴。中央新聞社会部地域課課長。

こんな物ではなかつた。部長・専務・代表取締役・社長・未来には必ず才能と努力に見合つた高みを望めると信じ続け、戦い続けた自分の一生は、夢半ばにして草葉の陰に消えてゆく。

社会という枠組みの中から一度逸脱すると、個人というのは無力に等しい。

身を粉にして働き、それなりの見返りがあつて当然と思っていた新聞社からは、病気を理由に退職を迫られ、退職金という律儀で冷血な報酬を最後に連絡を取る事を禁止された。また、人という字の成り立ちのように助け合い、田をかけながら長く付き合つてきた同僚たちは、私の『先行き』が見えたと思うと、手の平を返すように冷たく私をあしらい、一方的に連絡を絶ち、一万円札が一枚あれば事足りる果物の詰め合わせを病院に直送させるだけで、遂には誰も見舞いには来なかつた。

権力闘争に飢えていた私を、皆は心の中で嫌つていたのだろうか。私はその事実に怒りを覚えたが、今のこのボロ布の様な体では、復讐の行動に出るほどの元気もなかつた。

「…」

幸い私が運ばれた病院は、比較的ベッド数に余裕があり、希望通りの個室を用意させることが出来た。均等にラインの入った白い壁、外から運ばれてくる鼻に付く薬品の匂い、機械的に音を発する電子機器、患者と会話しながら熱心に仕事をこなす看護婦の足音、小さく聞こえてくる医者の愚痴。私だけが世界から取り残されたような、そんな静止した生き方も悪くないと感じさせる一幕。

私は死を前にして、夢も復讐も途絶えた今はただ、これからも生きる妻と、今年で三つになる息子の未来を考えることで頭を一杯にすることにした。

「…迷惑をかけたな。すまん」
「えつ？」

梅雨の五月雨が打つ窓を覗きながら、結婚して8年目の妻に私なりの労いを口にした。

妻は驚いて林檎の皮を剥く手を止めた。驚くのも無理は無い。新報社という仕事柄、激務をこなし続けなければならなかつた私は、それまで家庭を顧みた事など一切無かつた。休暇を見越し、妻が息子と一緒に日帰り旅行を計画した時も、私は政治家の汚職の記事で出張つていた。悲しむ妻子を見ながら、私は冷酷にも「涙は墓の前まで残しておけ」と言つた。そんな夫婦仲は、我ながら冷え切つていたと思う。この労いの言葉でさえ、私の父が臨終の時に「家庭を大事にしろ」と言つていたのを、ふと思い出したからだ。

「…」

妻の唇が震え、目に力が入った。激昂は次第に妻の顔に血の巡りを鮮明に映す。

自分勝手に生きて、自分勝手に死に際を迎える男を前に、生きて行かねばならないという十字架を背負わされた妻の激昂は、当然だった。私は、弱者であることに怯えた。あたかも権力の流転を指すよう、強者が弱者に成り下がれば、この時とばかりに痛めつけられる、と私は勘ぐった。だが、ふと考え方直してみれば、私はもうすぐ死ぬ。死ぬ前に素直な気持ちで不満を漏らすというのなら、私にそれを止める権利は無い。

だが妻は、林檎の皮を剥ぐ手を動かし始める、微笑みながら「本当に」と言った。

何故だ。何故怒らない。

あれだけの事をしてきた私に、何故この女は怒らないのだ。死を迎えることにも驚かなかつた私は、この行動に怯えを抱かずにはいられなかつた。

この言葉の裏は何だ?とゲスな感情が私を包む。

「仕事に自堕落な私を怒らないのか?」

「怒っていますよ。誰があなたみたいな面倒な人を夫にしなければならなかつたのかつて」

「ならなぜ、それを言葉で言い表さない」

「ふふ、言わない事のほうが傷つくつて知つてるからかな」

「確かに死ぬことより怖いと思つた」

「本当は私だって言いたいことが山ほどあるけど、言わないのがせめてもの復讐よ」

「一生の願いだ。頼む。お前の思つてゐる事を全て言つてくれ」

「…

妻は黙つて手に持つた林檎を置いて、私の手を握った。俯き顔で放つた言葉は、私にとつて意外なものだつた。

「死なないで…」

それから先、私たち夫婦は口を利かなかつた。五月雨が打つ窓の音が、耳障りにも聞こえた。

「パパ、死んじゃうつて本当なの？」

病室に幼い声が聞こえる。

すでに衰えた筋肉が肺に十分な酸素を送れなくなつた私は、鼻に酸素を運ぶ呼吸器を直接つけられていた。体を蝕み始めた激痛と、朦朧とする視線の先には、愛らしい幼稚園児の姿があつた。襲う激痛を鎮痛剤という幻想で堪えながら、微笑みかける我が子の質問に、私は答えようとベッドを起こした。

「そんな事を誰から聞いたんだ」

「外の看護婦さんがね、言ってたんだよ、パパはもうすぐ死んじゃうつて」

「…

「死んじゃうつてどうこうこと？」

「…

「ママは言つてたもん。パパは遠いところへ旅行に行くだけだつて」

「…

「ねえパパ。死ぬってどういうこと?」「

「…皆の前から居なくなるってことだ」

「居なくなる? いつ帰つてくるの?」「

「…帰つてこない。いや、帰つてこれない」

「どうして?」「

なんと言つて説明すれば息子が理解できるか、私は四苦八苦しながら死の概念を説明した。もちろん息子のためを思つて、「死」そのものの本題を避けることも出来た。だが、私は早く現実を知る事こそ重要だと考え、矮小なエゴを息子に押し付けた。

「この世から消えてなくなるのだ。パパは」

「?」

「大人になればわかる。パパが消えると悲しいか?」「

「悲しいってどういうこと?」「

「ママが、パパのせいで日帰り旅行が中止になつた時、涙を流しだだろう。ああいうことだ」

「よくわかんないけど。パパが居なくなつたら僕は泣いちゃうよ」「…ママを大切にしろ。パパが居なくなつても、その言葉だけは忘れるな」

「やだよ。居なくならないでよパパ、いやだよ!」

「お前は優しいな。パパには似ても似つかない」

「似てなくてもいいよ! 僕はパパが居なくなるの嫌だ!」「

「…」

私は、精一杯の感情表現と今にも泣きそうな必死な声をあげる息子の姿に、思わず目元が緩んだ。復讐も夢も敗れ、散るまでとなつた枯れたはずの肉体に熱い物がこみ上げる。白いシャツを掴む息子の手の震えが私に死を恐れさせ、生を惜しませる。不憫だ。この子を置いてゆくには、余りにも不憫すぎる。だが、親として、父として

言わねばならない事が一つある。

そう。

私も父と母から教えてもらつた、臨終の言葉だ。
ベッドから起こした体を寝かすと、私は幼稚園帽を被つた息子の頭
をさすりながら、臨終の言葉を述べることにした。

「今から言う事を覚えて、パパの前で約束しろ。…きっとお前が
大人になるまでに役に立つ」

「うん…」

その時、鎮痛剤が切れるのを感じていたが、私は堪えた。
全身を襲う断続的な痛みが、私の思考と言葉に蓋をする。
唇が震える。思うように喋れない。目蓋が重い。目が霞む。
痛みに堪えながら息子の頭に置いた私の手。その先から息子の熱は
感じられない。

震えた指先が息子の頭を捉える事、その触覚だけが唯一の臨終の言
葉への道しるべだった。

「…足搔いても、地を這つても、自分を信じて何が何でも生きる。
パパのように、誰かを悲しませるような事だけはするな」

私が伝えたかったことの半分も言い切れない臨終の言葉。
響き始めた耳鳴りの中で、息子は確かに言つた。

「うん。ぜつたい守るよ」

私は見え始めた息子の成長を薄らと閉じ行く目で見ながら、次第に
遠くなる意識の中で私は体の感覚を失つた。鳴り止まぬ看護婦達の
声。時期が早すぎると驚く医師達。ただ泣き崩れながら私の体を掴

む妻。わけがわからず混乱しながら集中治療室の前で「パパ」と一
言叫んだ息子。それらの音を消え行く聴覚で聞きながら、私は最後
の時を迎えた。

「せつたいがるよ…パパ」

臨終の言葉は、確かに云わった。

どうやら最終履歴の端には、良い父を演じたと書かれたようだ。

(後書き)

話として纏まってなくてすいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4017e/>

臨終の言葉

2010年10月22日00時54分発行